

第33号の刊行にあたって

手 嶋 將 博

文教大学教育学部教授（同教育研究所所長）

Introduction

TESHIMA MASAHIRO

(Director-General, Institute of Educational Research, Bunkyo University)

近年、日本の教育現場では教員志望者が激減している。その原因のひとつが、現場で働く教員の過剰な業務負担である。いくら「やりがい」を強調しても、年々、業務内容の増加・多様化・複雑化が進む教育現場の「忙しさ」（のイメージ）が、その魅力を相殺してしまい、多くの志望者が教職を選ばなくなってしまっている。その学校現場では、個々人の個別最適化を目指す教科指導に加えて、多岐にわたる事務作業や課外活動、保護者対応を含めた生徒指導など、次々とタスクが降りかかる。こうした多忙な環境では、教員自身の心身の健康が損なわれ、結果的に教育の質にも影響を与えることになる。

その一方で、教員給与の引き上げが議論されているが、この議論は学校現場の状況と、教員志願者の「想い」に対してあまりにも空回りしているのではないか。令和6年の年末まで、文科省と財務省との間「給特法の調整額」を13%に拡充する案と、働き方改革を進めて残業時間を抑え、その結果として段階的に10%の給与引き上げを行う案が対立していた。しかし、教員志望者にとって、このような給与引き上げの話はあまり響いていないように感じられる。なぜなら、その前に解決すべき問題—過剰な業務負担が残ったままであるからだ。この課題の解決策としては、まず業務負担の軽減が必要不可欠であり、その方法のひとつが「ワーキングシェア」の導入であろう。学校や教員にあれもこれもと仕事を振るのではなく、事務作業や保護者対応、課外活動のサポートなどを専門的に担当するスタッフを配置することで、教員が本来の業務に集中できる環境を作り、結果的に質の高い教育が提供できる。来年こそは、論点がずれた給与引き上げ議論から、もう少し現実対応的な、業務の精選・分担の議論へとシフトして、建設的な解決案を探り当てて欲しいものである。

なにはともあれ、今年度も例年通り充実した多くの論考を収めた、本研究所の紀要最新刊33号を無事に発行できたことは、まことに喜ばしい限りである。本紀要の編集・発行にあたって、執筆者各位をはじめ、編集・校正作業等、さまざまな面でご協力いただいた皆様に、まずは心より感謝申し上げたい。

本紀要第33号では、「特集」として依頼論文2編、「自由研究」として、研究論文6編、研究ノート1編、実践研究1編、実践報告2編、書評1の計11編で、全13編の研究成果を掲載している。

今年度の特集テーマは、『「自己調整学習・自由進度学習」の展望』に設定した。

令和3年答申では、「個別最適な学び」について「指導の個別化」と「学習の個性化」に整理し、児童生徒が「自己調整しながら学習を進めていくことができるよう指導すること」の重要性を指摘している。その際、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するためには、教師が効果的な指導を実現することや、子供一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどの「指導の個別化」が必要であることを示している。

また、基礎的・基本的な知識・技能等や、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として、幼児期からの様々な場を通じての体験活動から得た子供の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、探究において課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を行う等、教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が、自らの学習が最適となるよう調整する「学習の個性化」が必要であることも示している。

こうした動きを受け、今号の特集では、「自己調整学習・自由進度学習」の展望に関する論考として、「「自学・自習」において「子供がする授業」への試行的改善－N小学校において実践に取り組む上で直面した課題や大切にしたこと－」、「本気でAgencyを育てるには？－自己調整学習＋探究と体験＋AIが果たす役割－」の2本の特集論文を掲載した。

また、自由研究として、「他者の成功・失敗経験の省察を通じた自発的学習の心理的メカニズム：大学生を対象とした探索的検討」、「学校教育における生成AI活用の現状と今後の課題」、「Gritとmindset理論を英語教師になるための自己分析チェックリストへの応用：パイロット研究」、「中学校英語授業におけるダイナミック・アセスメントの可能性－生徒の振り返りを用いて－」、「金銭セックスストーリーとは～SNSの交流アプリを利用したトラブルに関する実態調査から～」、「教員の専門性に関する他職間比較研究－教員の専門性の特性の探究－」（以上、研究論文6編）、「観光を教える大学で行われているサービス・ラーニング科目の実施状況の把握と整理－観光を学ぶことと地域をフィールドにした体験を通じて学ぶことの関わりについての研究に向けて－」（以上、研究ノート1編）、「豊かなかかわり合いの中で、今と未来にいきる－自分が好き、ひとが好き、運動が好き－」（以上、実践研究1編）、「小学校教師のエンパワメントを目指す英語実践研究」、「一斉学習と自由進度学習の統合による個別最適な学びの実現－公立小学校4年生算数科における授業実践と効果－」（以上、実践報告2編）、「木下通子著『知りたい気持ちに火をつけろ！－探究学習は学校図書館におまかせ』」（以上、書評1編）を収録しており、いずれの論考においても、各分野の最新の情報の提供および、多面的な視点からの考察が行われている。

本紀要が、教育の諸相に関する新たな知見や示唆を提供し、今後の研究・教育実践の一助となることを、切に願う次第である。